

再発肝癌をどこまで治療すべきか - 治療の生命予後 にもたらす効果, QOLの観点からの検討

著者	三上 恵美子
号	2238
発行年	2005
URL	http://hdl.handle.net/10097/22820

氏 名（本籍）	三 ^み 上 ^{かみ} 恵 ^え 美 ^み 子 ^こ
学 位 の 種 類	博 士（医 学）
学 位 記 番 号	医 博 第 2 2 3 8 号
学位授与年月日	平 成 17 年 3 月 25 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 専 攻	東北大学大学院医学系研究科 （博士課程）医科学専攻
学 位 論 文 題 目	再発肝臓をどこまで治療すべきかー治療の生命予 後にもたらす効果，QOL の観点からの検討

	(主 査)			
論 文 審 査 委 員	教授 下瀬川	徹	教授 里 見	進
	教授 林	富		

論文内容要旨

背景・目的

肝細胞癌（Hepatocellular carcinoma：HCC）は、背景肝として慢性肝疾患を有するため再発を繰り返す疾患であり、腫瘍の形態や肝予備能によって治療法が異なってくる。しかし臨床の現場では同一患者に対して再発毎に種々の治療法を組み合わせるため、単一の治療法についての予後予測や再発確率のデータを用いることができない。また再発に対して行う治療については肝予備能の低下を来したり、根治的治療が不可能であることが少なくないため予後を改善しているかどうかは不明である。そこで HCC の再発に対して行われる治療が予後の向上に貢献しているかどうかを検討した（研究 A）。また反復する治療が患者の QOL に与える影響についても検討した（研究 B）。

対 象

（研究 A）1989 年 12 月から 2003 年 12 月までに当科に入院した 386 人の治療症例のべ 878 名。

（研究 B）2002 年 10 月から 2004 年 6 月までに当科に入院したのべ 96 症例。

方 法

（研究 A）再発症例に対する画像診断学上の治療効果と予後を Child-Pugh 分類毎、治療回数毎に層別化した。治療効果は Tumor-Mass Reduction Grade を定義し、Kaplan-Meier 法で検討した。

（研究 B）SF-36 による QOL 値を肝予備能、入院回数、治療前後、性別、合併症の有無等で比較した。

結 果

（研究 A）Child-Pugh A では多数回の治療が可能で良好な reduction が生命予後向上に寄与する。Child-Pugh B では数回の治療は有効だが、多数回では治療効果と予後との間には相関がなくなる。Child-Pugh C ではいかなる mass reduction も予後には寄与しない。したがって Child-Pugh B, C の患者に対して従来の治療方針ではなく肝移植等の新たな治療戦略をも含めた検討を進めていくべきと思われる。

（研究 B）治療前後においては QOL に有意な差は見られなかったが、身体的要因では低下傾向があり、長期的には反復治療が QOL の低下につながる可能性はあると考えられる。

審 査 結 果 の 要 旨

背景・目的：肝細胞癌（Hepatocellular carcinoma：HCC）は、背景肝として慢性肝疾患を有するため再発を繰り返す疾患であり、腫瘍の形態や肝予備能によって治療法が異なってくる。しかし臨床の現場では同一患者に対して再発毎に種々の治療法を組み合わせるため、単一の治療法についての予後予測や再発確率のデータを用いることができない。また再発に対して行う治療については肝予備能の低下を来したり、根治的治療が不可能であることが少なくないため予後を改善しているかどうかは不明である。そこで HCC の再発に対して行われる治療が予後の向上に貢献しているかどうかを検討した（研究 A）。また反復する治療が患者の QOL に与える影響についても検討した（研究 B）。

対象：（研究 A）1989 年 12 月から 2003 年 12 月までに当科に入院した 386 人の治療症例のべ 878 名。（研究 B）2002 年 10 月から 2004 年 6 月までに当科に入院したのべ 96 症例。

方法：（研究 A）再発症例に対する画像診断学上の治療効果と予後を Child-Pugh 分類毎、治療回数毎に層別化した。治療効果は Tumor-Mass Reduction Grade を定義し、Kaplan-Meier 法で検討した。（研究 B）SF-36 による QOL 値を肝予備能、入院回数、治療前後、性別、合併症の有無等で比較した。

結果：（研究 A）Child-Pugh A では多数回の治療が可能で良好な reduction が生命予後向上に寄与する。Child-Pugh B では数回の治療は有効だが、多数回では治療効果と予後との間には相関がなくなる。Child-Pugh C ではいかなる mass reduction も予後には寄与しない。したがって Child-Pugh B, C の患者に対して従来の治療方針ではなく肝移植等の新たな治療戦略をも含めた検討を進めていくべきであると思われる。（研究 B）治療前後においては QOL に有意な差は見られなかったが、身体的要因では低下傾向があり、長期的には反復治療が QOL の低下につながる可能性があると考えられる。

第一次審査で指摘された不備が、適切に修正されており、審査の結果、本論文内容が十分学位に値することが確認された。

よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。